

# 読む力を育てるための学校体制の確立とその実践

— 児童を読書ずきにするための教育環境づくり —

足利市立筑波小学校

## 0 はじめに

本校では、昭和49年度の実践研究の重点として、「基礎学力の向上」と「体力増強」の2つの柱を打ち立てた。

その2つのうち、体力増強についての研究は、特に、授業の中での「評価カード」の活用による学習指導の改善と、業間運動のくふう、実践という面から子どもたちの体力増強のために努力してきた。この体力増強についてのことは、いずれの機会にゆずることにして、もう一方の基礎学力の向上という面について、本校で考えたこと、また、実践してきたことの一部を発表し、関係各位の御意見、ごべんたつをいただきたい。

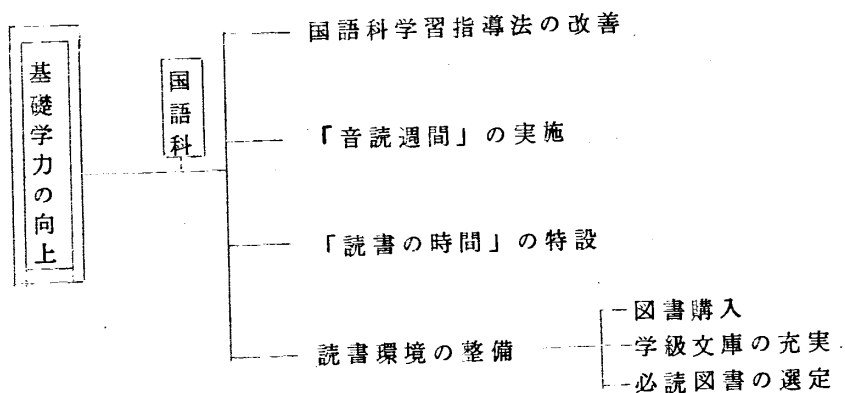
## 1 基礎学力の向上についての考え方

基礎学力という概念もたいへん広く、抽象的なので、本校で考えた基礎学力ということについて述べると次のようなものである。

- (1) すべての教科の基である「文が読める」「本が読める」という読み取る力をつける。
- (2) 文章(文)をすらすら読むことができる。
- (3) (1)・(2)の力をつけるために、児童を読書ずきにし、情操を高めたり、想像力や思考力を高める。

## 2 基礎学力の向上対策

本校では、基礎学力の向上について、下の図に示すような対策を考えた。これは学校あげての体制で、校長以下15名の職員が一丸となってこの研究、推進にあたっている。



以下これらについて、説明を加えさせていただきたい。

### (1) 国語科学習指導法の改善

国語科では、次のような研究テーマを掲げて、研究している。

## 〔研究テーマ〕

児童が自分から文章を読むようにするには、教師はどのような指導の手だてをしたらよいか。

児童が自分から読み取るための手だてのしかたを求めて

### ア テーマ設定の背景

#### ○ 子どもの実態から

本校の児童の実態は、およそつぎのように受けとめることができる。

- ・ 文章をすらすら読めず、つかえたり、まちがって読む児童が多い。（特に男子に多い）
- ・ 文章の意味を読み取る力が弱い。
- ・ 算数科や社会科、理科などの文章をまちがえて読んでいる場合が多い。
- ・ 上記の教科の読み取りができないために、問題をとりちがえている場合がある。

#### ○ 教師の指導上の問題から

もう一つは、教師側の反省である。反省点として次のようなもの考えた。

- ・ 児童に読む力をつけるために、どれだけ力を注いでいたか。
- ・ 児童に読ませる活動の場や、時間をどれだけ与え、文章をどれだけ読ませているか。

以上の点から、なんといっても、児童の読む力を伸ばしてやりたいと考え、テーマを設けた。

### イ テーマについての基本的な考え方

テーマについての考え方は、次のようである。

児童に読む力をつけるという発想は、読む能力を育成することにある。すなわち児童が自分の力で読み取る力をつけることである。

これに対して教師の立場は、あくまでも児童の読むことを援助してやることである。この援助の内容が、教師の手だてとなって具現し、児童の読む力を伸ばすことになる。

ともすると、教師が、読み取るための文章の扱いを、説明によって内容をわからせようとしたり、さし絵などを使って説明しようとするところがある。

このことは、文章を読むことを忘れて、内容を理解させようとするものである。児童が、自分の手で、自分の目で、文章にあたり読み取る作業をする。この読み取りの作業を通してこそ読みの能力が育つと考える。

「進んで読み取る」とは？

「進んで」とは、「学習のめあて」なり「学習課題」をはっきりさせ、それをふまえて児童が自分（たち）で、読み取っていく活動（読み取ったことをまとめる。要約する。話し合う。などの諸活動）のことである。

つまり、児童が一つ一つについて教師から直接の指示や助言を受けないで、学習のねらいにそって読み取っていく活動と考える。

授業の中で、この進んで読み取る活動が、質的に高く、時間的に多い方が望ましいと考えるが、一般的に言って、低学年より高学年の方が望ましい姿に近いと考えねばならないであろう。

以上まとめると、説明的授業では、読む力が児童に育たず、読む能力は、児童が直接文章を操作しないと育たないと考えるわけである。

ウ 研究計画

以上のテーマにどのようにせまるか、大へんむずかしい問題であるが、一応、次のように3年間の継続研究を前提にこの授業を進めていくように考えた。

○ 第一年次（昭和49年度）

まず、児童が進んで、自分から文章に取り組み、読み取る活動をするためには、どんな教師の手だてが有効だったかをさぐる。

○ 第二年次（昭和50年度）

前年に一応の有効だった手だてをまとめたものを、全職員で実践し、その中から、さらに有効な手だてをねり上げるようにする。

○ 第三年次（昭和51年度）

テーマについて一応の成果をまとめる。

エ 第一年次（昭和49年度）の研究日程と組織（国語科の指導研究のみを本校の研究日程より抜粋）

月 日（曜）	教 科	低学年ブロック	中学年ブロック	高学年ブロック
9.18（水）	国 語	◎柴崎 山本 △栗原 吉野 石 島 栗 田		◎平野 ○岡田 △砂川 台 橋本 高木
11.6（水）	国 語	◎栗原 山本 柴崎 吉野 ○石 島 栗 田		◎岡田 砂川 台 △橋本 ○平野 高木
11.22（金）	国 語	◎山本 柴崎 △吉野 ○栗原 石 島 栗 田		◎橋本 ○砂川 岡田 台 △平野 ○高木
	◎ 授業者	9.18	相場指導員	
	○ 司会・進行	指導者 11.6	校長・教頭・教務・柴崎	
	△ 記 録	11.22	別計画	

オ 児童が進んで読むための教師の有効な手だて

第一年次の3回の研究会と日常の授業実践から、かなり有効な手だてになることとして、次のようなものがうかび上がってきた。

○ 学習課題のは握

児童が自分から文章を読み取るためには、児童自身、ひとりひとりが読むための目あてなり、学習課題を明確には握しなければならない。その方法として、大きく二つに分けられる。一つは、教師が学習のめあてや課題を与える方法である。この方法は、時間の不足している

場合や、読ませる作業を多くする場合には、大へんよい方法である。しかし、児童が読むめあてや課題をつくることに参加していないので、やや、受け身の学習におちいる傾向がある。もう一つの方法は、教師と児童が話し合っただけで学習のめあてや課題を決める方法である。

この方法は、大へんよい方法であるが、結局のところ、ある単元の学習計画をたてることまで考えねばならないので、この方面の研究が重要なものになる。

本校では、本年度は、そこまでは考えないことにして、本時の学習のめあてだけを考えることに限定してきた。しかし、これをさけて通ることは許されない気もするし、さらに、指導計画までも検討しなければならないと考える。指導計画の検討については、児童が文章を読み、その作業をすすめるには、大へんな時間を要する。したがって、現在の指導計画ではとても消化できない。そこで、教材をもっと精選したり、重点を考えていかないと、この問題を解決することは不可能であるように思える。

#### ○ 作業用紙

作業用紙も、進んで読み取るための有効な手だてとして考えられる。作業の観点も明確であり大へんよい手だてであるがその形式や内容については、かなりむずかしいものがある。

低学年などでは、読むことより書くことの方に力を取られ、本来の目的がうすくなったりするし、高学年でも、文学作品の心理曲線の書き方など、その他にも、いろいろな問題をふくんでいる。要は教材に合った、読むめあてに合った作業用紙・・ということになるわけだが、具体的な作業用紙となるといろいろな問題を含んでいて、実際には、第二年度の研究にゆだねる面が多くなってしまった。

#### ○ 話し合い活動

いろいろな場で話し合い活動が行われるが、国語の場合、読み取ったことをノートや作業用紙に記録したあとの話し合い活動が、読みを深め、進んで文章を読み取る手だてとして有効であるように思える。

読むめあてがはっきりして、読み取る。それについて話し合う。こんなパターンは、常にどの教室でも行われているが、さまざまな意見を確認したりする場合に、文章にもどらない場合が多い。文章にもう一度あたらせることが、個々の児童にとっては、フィードバックの成立であり、読みを深めたり、読む作業を意欲的にさせることになると考える。これらについても、さらに次年度には、実践を通して明確にしていきたいと思っている。

#### ○ その他のくふう

その他に、児童が進んで読みに取り組んだ例として次のようなものがある。

- ・ 作業化をくふうして読ませた。

文章に――や〰〰を引かせながら読ませた。

印をつけさせながら読ませた。

「     」をつけながら読ませた。

- ・ 準備をくふうして読ませた。

視聴覚機器を活用して読ませた。

板書・発問の計画をしっかりとさせた。

- ・ 文章の大きい変化・矛盾点などを発見させて読ませた。
- ・ 関連を発見させるために読ませた。などなどの報告もある。

以上いくつかの観点から教師の手だてということを述べてきたが、学習指導の改善ということからいうと、ほんの入り口にもあたらない。これから、さらに研究を進めなければいけないと考えている。

## ② 音読週間の実施

児童が声を出して文章を読めるようになることも、たいせつな能力の一つと考える。本校児童は、文章をすらすら読む力も、足りないという教師側の声を耳にし、音読の実態調査をしたことがある。その結果、特に男子に多いが、文章をすらすら読むことができない児童が多くいる事実がはっきりした。そこで、この児童たちが、少しでもすらすら音読ができるようにならないかという苦心した末、この週間の実施が決定した。

### ア 音読週間とは

音読週間とは、朝の10分間（8：30～8：40）の時間帯の中で、2人1組（または小グループ）で、音読をする。読む範囲は、だいたい教科書1ページぐらいで、現在学習している

単元の一部などを取りあげそこを読む。

そして、ひとりが音読をしているときに、他の人は、読みちがえがあるかないかをチェックして表に記録する。（右のような個人表をプリントして渡しておく。）まちがいの程度（尺度）は、学年によって統一している。

これを月に一週間

続けるのである。したがって月曜日よりも火曜日、火曜日よりも水曜日というように、まちがって読む数が少なくなっていくわけである。

### イ 記録からみた児童の実態

同一文章を一週間読むわけだから、次第に読む力もつき、まちがいの回数も少なくなっている。また、チェックを受けるので、児童は、熱心に読みの練習に励み、家庭でも練習してくる児童もいるようだ。

### ウ 問題点

月曜日	年 組 ( )						読む文
	月	火	水	木	金	土	
4							
5							
6							
7							
8							

この時間帯は、朝の職員打ち合わせのときであり、児童の管理、指導が十分でないので、改善がせまられている。また、評価の観点と尺度が明確さを欠くため、判定にむずかしいところがある。しかし、文をまちがわずに読んでみるという意欲が、読む力を育てている。

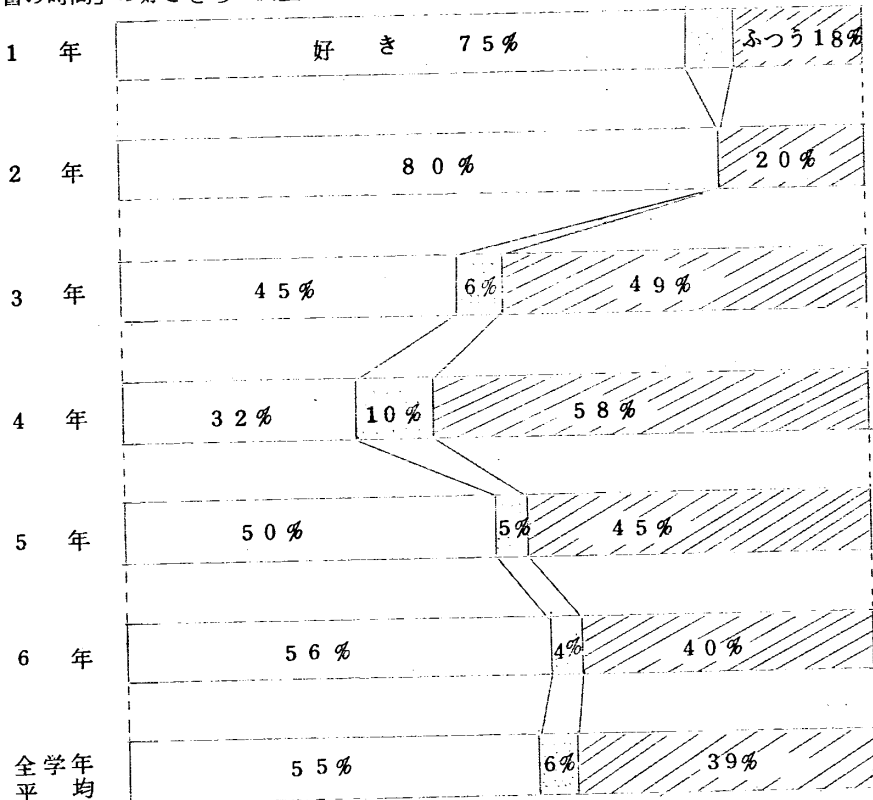
### (3) 読書の時間の特設

本校では、児童に読書を勧める意味で、毎週、火曜日と木曜日に、読書の時間を設けている。時間帯は、11:25～11:45の20分間である。(月・水・金の3日間は業間運動)この時間は、教師も、児童も一体となって読書をする。本の内容は、物語、童話、伝記、伝説などさまざまな自由な読書の時間にあてている。

#### ア 児童の反響

この時間を4月から続けてみて、児童がどのような意識をもっているかアンケートによって好き嫌い調査をやってみた。すると次のような結果が出た。

「読書の時間」の好き嫌い調査 (49.12.5調査)



この調査から見ても、1・2年の低学年は圧倒的に好き、その他の学年でも、4年生を除いて、半数、または、それ以上の児童がこの時間を好きと反応している。その理由のおもなものは、つぎのとおりである。

### <好きな理由>

・本を読むとおもしろいことができる。(1年)

・本読みが好きだから(2年・4年)

・読むとおもしろいから(3年)

・本が静かに読めるから。 ・楽しいから。(5年)

たくさん好きな本が読めるから。 ・好きな本が読めるから。 ・読書がこの時間に好きになった。 ・家ではテレビを見て本が読めないから。(6年)

など、いろいろな意見があった。きらいと反応した意見の中には、「よい本がない。」「読みたいのに読まなければならない。」「読書がきらい。」などの意見があった。

このようにみえてくると、この時間が、やや問題もあるが、かなり定着してきて、この時間に読書が好きになったとか、本はおもしろくないと思っていたが読んでみるとあんがいおもしろいというような意見さえ出て来るようになった。

### イ 問題点

一つは読書記録のしかたともう一つは、図書の数が足りないということで、児童の読みたい本を十分そろえてやれないということである。

前者の記録については、学校としてまとめておらず、学年によってまちまちになっている。どういう記録がよいか、昭和50年度に備えて現在検討中であるが、記録のために読書がきらいになるようなことだけは、さげなければならないという基本的な考えでいる。

後者の図書の整備については、十分ではないが、本校で努力してきた姿を、次の(4)のところで、くわしく述べることにする。

### (4) 読書環境の整備

#### <図書購入>

児童に図書を読ませる段階で大きな壁にぶつかる。それは、予算不足のために図書が購入できないということである。この点については、校長、教頭、職員が、まず、本を購入することに、できるだけ予算をかけようということになり、昭和49年度は、46万円以上の費用を予算として投入することで、ほぼ、達成している。児童ひとりあたりになると1300円程度しかあたらなけれど、これとて、かなりの思い切りがないとできないことである。

本校PTAの方も、この声を聞いて、PTAの事業としての廃品回収で得た収入のすべてを、図書購入にまわしてくれるということの了解をしてもらって、協力している。

購入については、職員が東京の卸問屋まで行って購入したりしている。このように、全校あげて、図書の購入に努力し、児童が少しでも、読書をして、本ずきにさせようと努力している。

#### <学級文庫の充実>

学校の図書館に本を充実させるよりも、学級文庫を充実させ、読む本をたくさん身近において読書させようという発想で、購入した図書を学級へ配っている。全教室に、五段のスチール本だなをそろえた。

〈必読図書の選定〉

児童に1年間に最低これだけは読ませたいということで、必読図書の選定をした。この選定は大へん苦勞したが、全国図書館協議会の資料と、本校の児童の読書の実態を考慮したうえ、本年度に決定したものである。

次にその選定したものをあげて参考にした。

各学年必読図書	昭和49年度選定	筑波小学校
1年	ぐりとぐらのおきゃくさま	なかがわりえこ (福音館)
	三びきの子ぶた	イギリス昔話 (福音館)
	大きなかぶ	昔話 (福音館)
	ひとりでおつかい	しみずみち (岩崎書店)
	ないた あかおに	はまだひろすけ (フレーベル館)
2年	大きい1年生と小さな2年生	古田 足日 (偕成社)
	ゆきごんのおくりもの	長崎源之助 (新日本出版社)
	モチモチの木	斎藤 隆介 (岩崎書店)
	かわいそうなぞう	つちやゆきお (金の星社)
	ひこいちとんち話	日本民話 (ポプラ社)
3年	ちいさいモモちゃん	松谷みよ子 (講談社)
	モグラ原っぱのなかまたち	古田 足日 (あかね書房)
	八月がくるたびに	おおえひで (理論社)
	センナじいとくま	松谷みよ子 (童心社)
	キューリー夫人	伝記 (ポプラ社)
4年	お月さんももいろ	松谷みよ子 (ポプラ社)
	月の輪ぐま	椋 鳩十 (小峰書店)
	ケンチとユリのあおい海	長崎源之助 (さかね書房)
	リンカーン	伝記 (ポプラ社)
	たぬき学校	今井誉次郎 (講学館)
5年	大造じいさんとガン	椋 鳩十 (牧書店)
	秋空 晴れて	吉田甲子太郎 (大日本図書)
	竜の子太郎	松谷みよ子 (講談社)
	シュバイツァー	伝記 (小峰書店)
	科学のアルバム19 食虫植物のひみつ	清水 清 (あかね書房)
6年	宿題ひきうけ株式会社	吉田 足日 (理論社)
	片耳の大鹿	椋 鳩十 (ポプラ社)
	福沢 諭吉	伝記 (小峰書店)
	おじいさんのランプ	新美 南吉 (岩波書店)
	ヴィーチャと学校友だち	ノーツフ (岩波書店)



### <父母の啓もう>

真に児童を讀書ずきにするためには、学校の環境だけを整備したのでは、十分でない。児童をとりまく環境の中でたいせつな家庭環境をどうするかという問題が残る。

そこで本校では、父母を少しでも啓もうすることを考えた。

すなわち次のようなことを計画し、実践した。

- (1) 児童図書購入のため廃品回収事業の実施。これを年3回（1学期に1回ずつ行う。）
- (2) 親子で讀書をするために、本校で、図書の出張販売を行う。（9月と12月）本校は、商店街からも遠いため、店の方からできるだけ多くの本を持ってきてみてもらい、児童向けの本や、父母向きの本などを販売し、好評であった。
- (3) PTA成人教育部の主催による講演会を開く。

演題は、「子どもを本好きにするには、どうしたらよいか。」講師は、和光大学の寒川道夫先生で、2月26日に行われた。

以上の3点から父母の啓もうを考えたわけである。

なお、参考までに本校の図書購入費の収入内訳を記すと、次のようである。

収入総額	46万円	(昭和49年度)
内訳	┌ 学校・・・・・16万円	
	├ PTA廃品回収・20万円	
	└ 興国文庫・・・・・10万円	

### 3 成果と今後の問題

直接児童に対して成果が見られたというより、校長以下職員が一つとなって、いくつかの観点から読む力をつけるためにアプローチする体制ができたことである。このことは、本当に幸せなことと信じている。

最初のページにも示したとおり、4つの柱を打ち立て、実践していることは、単に本校児童に読む力が育つだけでなく、讀書の中からいろいろな価値を見だし、情操や創造性を増し、人格形成上はかりしれない有形、無形のもを身につけると思われるのである。

この効果は、すぐに表れないにしても、きっと将来、花開くときが来るものと期待し、また、確信している。

今後は、この学校体制をさらに充実発展させ、きめ細かに児童を指導する問題や、讀書環境にふさわしい家庭のあり方など、さまざまな問題を解決していくよう努力しなければならない。

### おわりに

最近、児童の日常の会話の中に「○○ちゃん、△△読んだ?」「あれおもしろいよ。・・・」などの声が以前より多くなった。こんなことにも、本校の努力の一端があらわれたのかな?と考えているようなわけだが、関係各位のきたんのない御意見をいただきたい。

文責平野進

## 評

学校長をはじめとして全職員が一丸となつての研究のすばらしさが、まず読ませていただいてひしひしと迫ってくる。「研究は、新しい課題の発見である。」と言われる。随所に、今後の研究にゆだねられる・・・という表現を見いだすことができるが、これは、裏を返せば、それだけ研究が煮詰められている結果であると言うことができよう。研究テーマに対する基本的な考え方も、国語科の本質をとらえた適切なものであると考えられる。全職員がこの共通理解に立って、読むことの指導に当たっているという姿がすばらしいのである。研究の組織や進め方も、国語科の指導法研究を核として、子どもたちが進んで読もうとする意欲を持たせるためにその周辺にある研究素材をたくみからませ、まさに効果的であるとする。 (音読週間や読書時間の特設や父母の啓もうなど) 読む力は、読みとりの技能の向上と読もうとする意欲の盛り上がりとがあいまって身についていくものと考えられる。学校をあげての研究の更に今後の成果が期待される。